

Ito, T., & Iijima, Y.(2003). Posttraumatic growth in essays by children affected by the March 11 Earthquake Disaster in Japan: A text mining Study. Journal of International Society of Life Information Science, 31, 67-72. の和訳（当日配布）

3.11 震災の子どもたちの作文における心的外傷後成長（PTG）

ーテキストマイニング研究よりー

(Posttraumatic Growth in Essays by Children Affected by the March 11 Earthquake Disaster in Japan -A Text Mining Study-)

いとう たけひこ¹、飯島 有紀恵²
(Takehiko ITO¹ and Yukie IIJIMA²)

¹ 和光大学 心理教育学科（日本、東京）

² 相模女子大学人間心理学科（日本、神奈川）

第 35 回国際生命情報科学会（ISLIS）学術大会

2013 年 3 月 16 日 15:40-16:00

横浜国立大学理工学部講義棟 A 棟 A-202

要旨：本研究の目的は、東日本大震災を経験した子どもたちの作文から、子どもたちの語りの特徴を明らかにし、基本的自尊感情の再構成および PTG の存在と可能性を明らかにすることである。収集した作文 169 編のうち、小学校、中学校、高校に在学していることが明らかな 161 編を分析の対象とした。一人当たりの作文の文字数を表す平均行長は 601.9 文字であった。総文数は 6052 文で、平均文長は 16 文字であった。内容語ののべ単語数は 39415 で、単語種別数 6465 だった。未曾有な体験としての東日本大震災は、外傷、つまり危機的な体験およびそれに引き続く苦しみの中から、精神的な成長が体験されることがあるということが、子どもの作文の表現と内容から明らかになった。さまざまな悲劇を生み出した災害が、PTG を促進させるという面をもつことが明らかになった。

Keywords: Posttraumatic Growth, Self-Esteem, Disaster, Earthquakes, Tsunami, Nuclear Plants, Positive Psychology

1. 緒言

1.1 東日本大震災と子どもと PTG

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、地震と津波さらには原子力発電所の人災とも言えるトラブルが重なる未曾有の震災であった。この震災は日本のみならず、世界中に大きな衝撃を与え、様々な問題を提議するきっかけとなったことは言うまでもない。

この震災では、福島第一原子力発電所の放射能漏れ被害の深刻さが取り分け大規模なものであったと言える。放射能漏れにより、故郷を奪われ避難せ

ざるを得ない人も多く、この問題は復興の大きな足枷となっている。

放射能被害は今後何十年にもわたり私達の健康に害を及ぼし続けるものであるため、被害を受けた人々の身体的、精神的負担は大きい。その様な状況下で、心身ともに発達段階である子どもたちが、地震、津波、原発事故により受けた身体的、精神的ストレスはとりわけ大きなものであると言える。

そのため、本研究では震災における子どもたちの体験に着目した。子どもたちの体験そのものを作文に綴った作品は、子どもたちの心境および子どもたちが置かれている状況を把握するという点で重要な記録である。

本研究では、震災により被災体験をした子どもた

ちが、どのようにその体験と向き合い、成長しているかという点を、宅（2010）の心的外傷後成長（posttraumatic growth 以下 PTG）の観点から着目する。

PTG とは、「外傷的な体験、すなわち非常に困難な人生上の危機（災害や事故、病を患うこと、大切な人や家族の死など、人生を揺るがすようなさまざまなつらい出来事）、及びそれに引き続く苦しみの中から、心理的な成長が体験されることを示しており、結果のみならずプロセス全体を指すと」定義されている（Tedeschi & Calhoun, 2004；宅，2010：p.25）。

PTG で扱う外傷 trauma とは、「米国精神医学界刊行の診断体系(DSM-IV による PTSD 診断基準 A)で定義されている外傷に限定されず、ストレスの高い出来事から、ライフイベント、危機的な出来事までさまざまな内容のものが含まれる。むしろ、客観的にどのような内容の出来事が体験されたかというよりは、主観として、その衝撃の強さがどのように体験されたかに重点が置かれている」点が特徴である（宅，2010：p.25）。

PTG では外傷的な体験に直接関連する認知プロセスが重要となる。外傷的な体験直後は、ネガティブな認知プロセスである侵入的思考が優位となり、起きた出来事を常に考え続けるなど、さまざまな心理的・身体的症状が強くなることが多い。しかし、葛藤やもがきを通して、その体験を肯定的に意味づけようとしたり、何か意味をみいだそうとする前向きで建設的な意図的思考へ性質が変わることで、体験前の水準以上に成長する点が PTG の特徴である（宅，2010：pp.25-26）。

また、近藤（2012）の PTG 包括モデルをまとめると次のようになる。PTG への第 1 段階目は、外傷によって引き起こされた内面の変化に対して行うさまざまな挑戦である。それら挑戦は、嘆きの管理、信念と目標の確認、物語ることであり、これらが順調にできると沈思黙考・反すうの段階へ進む。これは、体験自体や体験に伴って起こった心的変化の過程を書いたり話したりする自己開示と並行して行われ、無意識的かつ侵入的に行われる。その後、社会文化的な身近にある PTG モデルや、より広い範囲で見聞きするような社会的テーマ、一般的な理想をめざしたモデルを参照するようになり、意図的な反すうや体験の全体像の転換が行われ、最終的な PTG の段階へと進む（pp.5-6）。

近藤（2012）は同時に、子どもの PTG モデルは一般的な流れとは異なるとも述べている。「外傷体験をした際にそれを評価し沈思黙考と反すうの段階に至るのは、大人の場合と同様であるが、一方で養育者の外傷体験後の反応（caregiver's post-trauma

responsiveness）が、その後の PTG までの過程に大きな影響を与えることとなる。つまり、養育者（親）の穏やかな精神状態や、ふだんからの親子の良い関係、悲嘆やストレスに対する適切な対処などが、重要な要素となってくる」と述べ、「その後の過程では、その子自身が持っているさまざまな能力（competence）、つまり問題に対処したり乗り越えたりする力や、自己効力感、さらには人間関係の調整力、未来への期待や希望を持てるかなどが最終的には重要になってくる」と付け加えている（pp.6-7）。

上記を踏まえ、被災体験をした子どもたちと身近な他者との関係および、子どもたちの PTG に着目する。

1.2 研究対象として収集した東日本大震災に関わる子どもの作文文献

以下の 4 冊を研究対象とした。

(1) Create Media（編）（2012）『子どもたちの 3.11：東日本大震災を忘れない』学事出版。

本書は、東日本大震災で被災した岩手県、宮城県、福島県、茨城県の 10 歳から 19 歳の 44 名の子どもたちが書いた被災体験記を集めたものである。それぞれの県ごとに子どもたちの被災体験記がまとめられており、被災地の写真も掲載されている。

(2) 森健（2012）『つなみ：被災地の子どもたちの作文集 完全版』文藝春秋。

本書は、被災体験をした宮城県、岩手県、福島県の保育園児から高校生までの子どもたちの被災体験記を集めた作文集である。ジャーナリストである森健氏が避難所を回り、直接子どもたちや保護者に依頼し、集めた作文である。集まった作文は 80 本以上であり、震災直後の 2011 年 4 月から 5 月にかけて書かれたものである。中には子どもたちが描いた絵や、手書きの文章も掲載されている。

尚、本書は森健（2011）『八月臨時増刊号 つなみ：被災地のこども 80 人の作文集』（文藝春秋）に福島県の子どもたちの作文を付け加えたものである。この作文は震災から 1 年が経過した後に書かれたものである。福島県の子どもたちからは 30 本の作文が寄せられた。

(3) 森健（2011）『「つなみ」の子どもたち：作文に書かれなかった物語』文藝春秋。

本書は、震災直後から継続的に取材を行っている森健氏が『つなみ：被災地のこども 80 人の作文集』にて、作文を提供した 10 組の家族のその後の半年間に焦点を当てた取材記録である。本文には、『つなみ：被災地の子どもたちの作文集』（2012）と重複するが、子どもたちの作文も掲載されている。

(4) 鎌田實監修 ふくしま子ども未来プロジェクト編集(2012)『はやく、家にかえりたい。: 福島の子どもたちが思う いのち・かぞく・みらい』合同出版。

本書は、震災当時に福島県に住んでいた小学3年生から高校3年生までの子どもたちの心境が作文で綴られている。震災時の恐怖や、原発事故により住み慣れた家から避難せざるを得ない心境が綴られている。

1.3 仮説

先行研究を踏まえた上で、本研究における仮説を以下のように立てた。

仮説: 信頼できる家族関係や他者関係のもとで、震災経験を受容し、自己開示できればPTGが期待できる。

2. 目的

本研究の目的は、東日本大震災を経験した子どもたちの作文から、子どもたちの語りの特徴を明らかにし、他者との関わりを通して基本的自尊感情やPTGの可能性を明らかにすることである。具体的には、Tedeschi & Calhoun (1996) が作成した心的外傷後成長尺度 (Posttraumatic Growth Inventory: PTGI) の5因子について、そのおのおのがどのように表現に表れているかを検討する。

3. 方法

3.1 分析対象: 分析の対象とした4冊とその理由

分析対象の可能性のある書籍として、以下の単行本を収集し、活字になっている作文のみを研究対象の可能性のあるものとして抽出した。

森(2012)からは、活字になっている85編の作文を分析の対象とした。森(2011)には、10編の作文が活字化されていたが、森(2012)と重複が6件あったので、重複のない4編を分析の対象とした。Create Media(2012)からは活字になっている44編の作文、鎌田(2012)からは活字になっている36編の作文を分析対象とした。

以上、活字になっている169編の作文が研究対象として適切かどうかを吟味した。なお、書いた時点での書き手の学齢による比較を行うために、作文の筆者を小学生低学年(1-3年生)、小学校高学年(4-6年生)、中学生、高校生の4つに分類した。その基

準は、年齢および本文中の記述が根拠になっている。幼稚園児1人と、高校卒業後に文章を書いたと思われる5人と、18歳で学校の記述がない2人の合計8人を分析対象から除外した。結局、169編のうち、小学校、中学校、高校に在学していることが明らかでない161編を分析の対象とした。

3.2 分析方法

これら被災体験をもつ子どもたちの語りをテキスト化し、Text Mining Studio Ver.4.1(Mathematical System Inc.)により、テキストマイニングの手法を用いて内容語の分析をおこなった。語りのデータは書籍の構成に従い、各作文の語りを1段落、1行として入力した。

分析は、テキストの基本統計量、単語頻度解析、ことばネットワーク、対応バブル分析の順に行った。これらに加えて、本研究では主に原文参照の方法を用いる。

3.3 倫理的配慮

すでに公表され、市販されている書籍の内容を用いた分析であるため、倫理的配慮は著作権に配慮する他は特に必要がない。

4. 結果

東日本大震災後に小学生、中学生、高校生が書いた体験者の作文は161編であった。一人当たりの作文の文字数を表す平均行長は601.9文字であった。総文数は6052文で、平均文長は16文字であった。内容語の延べ単語数は39415で、単語種別数6465だった。タイプ・トークン比 type token ratio は0.164と比較的低く、文中に同じ単語が繰り返し出現する傾向があることが明らかになった。以下、PTGに関する表現に絞って原文参照機能を用いて調べた結果を、Tedeschi & Calhoun (1996) の心的外傷後成長尺度 (Posttraumatic Growth Inventory: PTGI) の5因子にそって以下に示す。

4.1 第1因子「他者との関係」

子どもの作文に見られたのは、他者との関係・つながりの大切さへの気づきである。震災後には「絆」ということばが日本全体でよく用いられるようになったが、作文にもその表現や内容が現れている。ここでは、震災時に子どもたちが「家族」や、家族以外の「見ず知らずの他者」とどの様な関係性を持っていたのか、またどのような気づきを得たのかに焦点をあて、子どもたちの表現を分析する。

4.1.1. 「家族との関係」

この震災では多くの人々が家族や友人を喪った。震災で祖父を喪った男子高校生は「今回の震災で、家族のきずなの深さを実感できました。」と記述している。

ある中学生は、避難先で配給が来ない中、自分は食べるのを我慢し妊娠中の母や兄弟に食料を優先させた際の状況を次のように述べている。「私はなんとか母や兄弟にお腹いっぱい食べてもらいたく、自分は食べるのをやめました。」(中学生女子)。

4.1.2 「見ず知らずの他者との関係」

子どもたちの作文から、避難所などで見ず知らずの者同士が助け合っている様子の記述もみられた。ある中学生は、避難先で生活用水を集める際の状況を次の様に述べている。「水不足で。飲み水は自衛隊の給水車が来ましたが、それ以外の生活水は、雨水などを溜めてみんなで協力して、運びました。」(中学生男子)。他にも「みんな地震がくるたびにもうふを自分にかぶせたり人にかぶせてました。」(小学校高学年男子)など、見ず知らずの者同士が自然と助け合う愛他的行動の様子が記述されていた。

また、津波で身動きが取れなくなり家に祖父と共に取り残された小学生は、祖父が救助活動をする様子を次のように記述している。「二階からロープを探して、ベランダからその人に投げて、その人の体にロープをしばりつけ、となりにあった電柱をよじのぼって、家の二階のベランダまで来ました。その人に下着などの服以外の着れる服をやりました。その人は『ありがとうございます。ありがとうございます』と何度も言っていました。『助けてよかったな。きょう力することって大切だな』と思いました。」(小学校低学年女子)。

さらに、この震災では地震、津波被害の他に原発被害も発生した。原発被害を受けた地域の人々は放射能被害から逃れるため避難場所を転々としなければならない状況が続いた。福島県大熊町から避難した中学生はその時の状況を次のように述べている。「その移動途中で会った人達は、みんな心配してくれ、涙を流して泣いてくれました。私たちの事をこんなにまで愛し、心配し涙を流してくれる人がいます。」(中学生男子)。

これらの例のように、家族などの近い人間関係の枠を越え、見ず知らずの者同士が助け合う愛他的行動が自然発生していたことが明らかになった。

4.2. 第2因子「新たな可能性」

震災によって生活が激変した子どもたちにとって、災害による苦しみや悲しみは、また、あらたな可能性や希望を生み出す経験としても表現されている。

4.2.1 「震災経験から新たな目標が生まれる」

ある小学生は震災で父親を喪った。野球選手を経て、野球監督となった父を慕っていたこの少年は、作文の最後に「ぼくは、おとうさんにまけないせんしゅになりたいです。」(小学校低学年男子)と記述している。

ある小学生は人々が助け合う様子を見て「たくさん勉強をして看護師になりたい。人を助ける、人の役立つ仕事がしたいと思いました。」(小学校高学年女子)と記述している。

4.2.2. 「支援への感謝と復興への思いから生まれる希望」

ボランティアなどの支援に感謝し「もしも僕達が檜葉町に帰れるとなったから見守ってくれたみんなに恩返しをしたいと思います。そんな日が来ると僕は信じて、今を生きたいです。」(中学生男子)と記述する者や、「家がなくなり、どこに行こうか、とほうにくれる今、みんなで『笑顔』を忘れず、石巻の復興に向けて、がんばって、前より、良いくらしを作っていきたいです。」(小学校高学年女子)と復興への思いを記述する者もいた。

このように、震災経験から新たな目標が生まれ、また、ボランティア支援への感謝や復興への思いから新たな希望が生まれていることが明らかになった。

4.3. 第3因子「人間としての強さ」

震災による被害は、また人間としての強さを引き出すきっかけになっている。避難生活が続く中でも、子どもたちは未来へと目を向けており、以下の文面からもその決意が伺える。

4.3.1. 「過酷な状況下でも未来へと目を向ける強さ」

「私は、この出来事を一生忘れることはないでしょう。だけど、いつまでも引きずっていても前には進めません。過去は変えられないけど未来は変えられます。先が見えない未来だけど、私は一步一步、強く歩んでいきたいです。」(中学生女子)、「地震発生から日数が経つに連れて、自分の住んでいた町がどんな状況なのかわかるたびに何とも言えない心境になりますが、今はただひたすら前を向いて進

んでいくだけです。NEVER GIVE UP！」(高校生女子)。

4.3.2.「犠牲になった人々のためにも生きるという決意」

震災により犠牲になった人々を悼み、その人たちのためにも生きようという決意が表現されている文面もみられた。

「津波に追いかけられながらも生き延びた命、これから何事にも負けず、一生懸命生きていきたいとします。」(高校生男子)、「ぼくは東日本大震災に被災して、悲しい事がたくさんありましたが、貴重な体験をしたと思っています。ぼくはこの事を一生忘れてはいけないと思うし、この震災と大津波で亡くなった方の分も生きなければと思います。」

(小学校高学年男子)、「この命は、今まで以上に大切にし、亡くなった人の分まで一生懸命に生きようと思います。」(中学生女子)。

4.3.3「日本の特徴である第1因子と第3因子の関係からみえてくる強さ」

日本の特徴かもしれないが、第1因子の「他者との関係」に支えられて、第3因子の「人間としての強さ」が生まれてきていることにも着目したい。以下に、上記の関係がみられる文面を抜粋する。

「世界の人達が私達を応援してくれているので、私達もあきらめずにがんばっていこうと思います。」(小学校高学年女子)、「全国の人たち、また海外の人たちからも、たくさんの励ましや生活に必要な数々のものをいただいています。この場所に来て私達を助け、励まし援助してくれる多くの人たちがいます。自分は今、本当にたくさんの人の力で生きているのです。『ありがとう』の思いをいつもいつまでも忘れずに生きていこう、そう強く思います。」(小学校高学年女子)、「自衛隊の温かな料理、福祉ボランティアのみなさん、合唱団のみなさんの歌声、みな心に傷をおっている被災者のみなさんにはとても心にひびくものがありました。自分もとても感謝しています。これからも避難所生活は続くと思いますが、あの日で失ったたくさんの命を忘れずに、自分の明日に向かって精一杯頑張りたいと思います。」(高校生男子)、「私は、今まで助けてくれたみなさんと、震災後に出会ったすべてのみなさんに感謝して、これからの長い人生を生きて行こうと思います。」(中学生女子)。

このように、助け・助けられる関係から希望や感謝が生まれ、過酷な状況の中でも「生きて行こう」「がんばっていこう」という人間としての強さが生

まれていることが明らかになった。

4.4. 第4因子「精神的(スピリチュアルな)変容」

スピリチュアルな変容として、まず指摘できることは、特定の宗教への言及と言うよりも、自然の脅威・驚異に対する記述がみられたことである。未曾有の大震災という過酷な状況下においても、子どもたちの作文には自然の美しさや、命への気づきをあらわす表現がみられた。以下にそのようなスピリチュアルな表現が現れている文章を幾つか抜粋する。

4.4.1. 「自然の美しさ」

震災時に発生した津波を「映画でしか見たことない大きな津波」と表現していた高校生は同作文で、「しかし、その日の星空はすごくキレイでした。今まで見た星空の中で一番というほどに。翌日、目が覚めるとちょうど日がのぼるころでした。その太陽はまるで希望の光のような明るさをはなっていました。」と自然の驚異を述べている。他にも「3ヶ所の避難所を回るとき、ふと空を見上げると、今までに見たことの無いぐらい美しい星空がありました。光の無い街を、月や星はしっかり照らしてくれていました。」(高校生男子)、「学校に避難していた地域の方たちと津波を避けて山を登り、市役所に一晚泊まりました。その時に見た空は今までにないくらいきれいで、自分や町がどのような状況にあるのかすら忘れてしまいそうでした。」(高校生女子)などの表現がみられた。

4.4.2. 「命への気づき」

また、震災を通して命への気づきに関する記述もみられた。「生きてることはすごいきせきです。」(小学校高学年男子)、「この震災で本当の『命』の大切さを感じました。」(小学校高学年女子)、「命があることに感謝し、今を大事に生きていきたいです。」(高校生女子)、「私の命は、今も音をたて、動いています。それがわかると、うれしくて、いつも心の中で思います。『私は今、生きている』ということ。」(中学生女子)。

上記から、子どもたちは震災を通して地震や津波などの自然の脅威を体感すると同時に、星や太陽などの自然の美しさや、その中で生きる命の素晴らしさである自然の驚異も体感していることが明らかになった。

4.5. 第5因子「人生に対する感謝」

震災を通し、震災以前の当たり前の日常が当たり

前ではないことに気づき、今までの人生や日常に対して感謝する表現がみられた。

4.5.1. 「今までの日常に対する感謝」

「私はこの大震災でふつうの生活がとても幸せだということに気づいた。私は、この体験を何かにかしてあげたいなと思う。」(小学校高学年女子)、「今私は、朝昼晩、三食きちんと食べれること、お風呂に入れること、ふとんに寝れることなど『あたりまえの生活』ができることに感謝しています。」(小学校高学年女子)、「日々ふつうに暮らせるようになったら、その一日一日を大切にすごしたいと思います。」(中学生女子)。

4.5.2 「自分の人生に対する感謝と他者の存在に対する感謝の関係」

また、自分の人生に対する感謝は、他者の存在に対する感謝とも深く関連していることが次の表現などから明らかになった。

「震災の前、大好きな私の家で家族みんなで生活していたこと。お母さんと一緒にごはんを作ったこと。家族みんなで食べたこと。いつでも電気がついて蛇口をひねれば水が出たこと。あたりまえのように思っていたその一つが決してあたりまえなのではなくて、とても大切に幸せで何よりも宝ものだと思うのです。」(小学校高学年女子)、「こうして大好きな家族とご飯を食べれることを、寝れることを、すごく幸せに思います。」(中学生女子)、「私の家族は、全員無事でした。いつもだったらあたりまえのことでも、今はそのことがすごい奇跡だと思います。」(中学生女子)。

上記のように、子どもたちは震災を通して、震災以前の日常が当たり前の日常ではないことに気づき、幸せや感謝を感じていることが明らかになった。また、家族や大切な人々が側にいることの幸せにも気づきを得ており、そのことに感謝していると言える。つまり、大切な人たちと共に生きることは当たり前ではなくとても幸せなことであり、その気づきが自身の人生にも喜びや感謝、幸せをもたらしていると言える。

4.6. 子どもの作文における PTG の表現と内容のまとめ

以上の原文参照により未曾有な体験としての東日本大震災は、外傷、つまり危機的な体験(災害や事故、大きな病を患う事、大切な人の死など、人生を

揺るがすようなさまざまなつらい出来事) およびそれに引き続く苦しみの中から、精神的な成長が体験されることがある(宅,2010)ということが、子どもの作文の表現と内容から明らかになった。さまざまな悲劇を生み出した災害が、また、PTGを促進させるという面をもつことが明らかになった。

5. 考察

未曾有の大震災により、子どもたちが受けた精神的、身体的衝撃は言うまでもない。しかし、上記で述べたように、子どもたちは守ってくれる大人たちが側にいる安心できる環境で、震災によって引き起こされた内面の変化と対峙することが出来たと言える。

また、被災体験を通して命の大切さや、家族や仲間との絆、当たり前の日常に対する感謝、支援に対する感謝などのポジティブな意味合いを持つ感情も感じており、これらは前向きで建設的な意図的思考に通ずる面があると言える。

さらに、被災体験を作文という形で語ることに大きな意味があると言える。この作文はすべて、強制ではなく子どもたちの意志により書かれたものである。自身の心の内を文章で表現し、他者に伝えるという自己開示は PTG のプロセスでも重要である。

見守ってくれる大人がいる環境下で、自身の体験や感情をオープンに表出する経験は、回復および成長に際して重要なプロセスであると言える。その経験を積み重ねることで PTG へとつながると推察される。

そのことに加え、筆者らは PTG へと進む過程で子ども同士の人間関係も重要になると考えている。共に遊び、共に語り、同じ時間や感情を共有し、共感することが PTG を促進する要因の1つになると推察するからだ。子どもだからこそ感じる視点を共有できる仲間は子どもにとって重要であると言える。

すでに述べたように、結束の強いコミュニティにおける家族のような人間関係や、友だちとの関係は、子どもたちの成長にとって欠かすことができない存在である。原発被害などで、家族、コミュニティ、友だちと離れ離れに避難せざるを得ない子どもたちにとって、安心でき、共感できる人間関係を築くことが重要であり、それらが更なる成長をもたらすと言えよう。

このような PTG は、統合失調症 schizophrenia のラジオインタビュー(松田 Matsuda, 2012)、激痛を伴う線維筋痛症(末吉 Sueyoshi, 2012)など様々な苦労や

困難の経験をとおして、体験されていることが明らかにされてきている。

6. おわりに

震災から2年が経った。今もなお、原発事故は収束の目処がたっていない。復興作業も放射能被害によりスムーズに進んでいないのが現状である。そのため未だに、家族や友人と離れ離れの生活をせざるを得ない子どもたちもたくさんいる。しかし、森(2011)が述べているように、家庭の中心に子どもの笑顔があり、子どもの前を向く力が家族の救いとなっている事実は変わらない (p.279)。その子どもたちの笑顔と前を向く姿勢が、私たちにたくさんの希望の光りをもたらしてくれている。

7. 謝辞

本研究に使用させていただいた作文の作者である子どもたち、そして全ての子どもたちに心から感謝します。また、ていねいに原稿を見ていただいた末吉悦子さん(和光大学)に感謝します。

8. 文献

- 服部兼敏(2010)『テキストマイニングで広がる看護の世界: Text Mining Studio を使いこなす』ナカニシヤ出版。
- 近藤卓(2010)『自尊感情と共有体験の心理学—理論・測定・実践』金子書房。
- 近藤卓(編)(2012)『PTG 心的外傷後成長: トラウマを超えて』金子書房。
- 松田青那(2013)『生きづらさについての語りの分析: Posttraumatic Growth に着目した統合失調症の語りのテキストマイニング』和光大学学生研究論文集(未公刊)
- 森健(2011)『「つなみ」の子どもたち: 作文に書かれなかった物語』文藝春秋。
- 尾崎真奈美(2012)『ポジティブ心理学再考』ナカニシヤ出版
- 末吉悦子(2012)『線維筋痛症体験者の語りのテキストマイニング: 痛みの表現の分析を中心に』(未公刊)
- 宅 香菜子(2010a)『外傷後成長に関する研究』風間書房。
- 宅 香菜子(2010b)「がんサバイバーの Posttraumatic Growth」『腫瘍内科』5(2), 211-217.
- Taku, K., Calhoun, L. G., Tedeschi, R. G., Gil-Rivas, V.,

- Kilmer, R. P., & Cann, A. (2007) Examining posttraumatic growth among Japanese university students. *Anxiety, Stress, & Coping*, 20, 353-367.
- Tedeschi R. G., & Calhoun, L. G. (1996) . The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9, 455-451.